

が小石ばかりでその流れは滝のよう^{たき}に激しく、厳しい冷たさに指がちぎれるかと思うほどです。

それから小川のヒエナエイを経て丘に登り、さらに野原を2キロほど進んで大きな岩の上に登ると、四方の山々が良く見えます。ここで草原に火を放ったところ、風にあおられ、その炎^{ほの}はまるで獣^{けもの}が走るような勢^{いき}いで広がり、1キロほどその焼原を下って、ホンビバウシ、ホロビバウシの2つの川を渡り、トドマツの山を越えて4キロほどで、さらにホンカンベツ、ホロカンベツの2つの川を渡りました。これらの川は空知川に合流する川です。

ここからさらに4キロほど進むと、葦^{よし}の茂る原野を抜け、

富良野川^{ふらの}の岸に出ました。この川の水は十勝岳の硫黄山^{いおう}が源流なので、硫黄^{いおう}の匂いが鼻をつき、手ですくつて飲んでみようとしたが、アイヌたちが「毒^{どく}があるからやめなさい」と、止めました。その昔、十勝のアイヌたちが寒い中、この場所を通り、この川だけが凍つていなかつたので、毒とは知らずに川の水を飲んでたちまち死んでしまつたと伝えられているそうです。どんなに厳しい寒さにも凍らず、また一尾^{いおひ}の魚も住むことはない川なのです。この川を渡り、原野を2キロほど進み、小川のクヲナイを越え、レリケウシナイという小川の岸辺^{きしべ}で宿営しました。

さて、ここからの眺めといえば、東には美瑛岳^{びえいだけ}のふもと



美瑛町から見た美瑛岳

かつては硫黄で川が濁っていたため、アイヌ語で「油ぎた」を意味する「ピイエ」が由来。



望岳台から見た十勝岳

標高 2,077m の火山で、武四郎が訪れる 1 年前（安政 4 年）に噴火した記録が残っている。